

二〇〇〇年 しずおか

連詩の会

「千年という海」の巻



連詩は海外でもRENSHIIと綴られる。連歌や連句に端を発する連詩は、最近ではむしろ日本よりも欧米のほうで盛んであるといえるかもしれない。

とはいえ本家日本。とくに静岡では連詩熱が年々高まり、こうした波を受けて、今年も「連詩の会」が開催された。さばき手には連詩を最初に試み、第一人者といわれる大岡信氏。今回は海外から中国を代表する現代詩人北島^{ノボ}氏を迎え、「千年という海」の巻」と題して四十編の詩が巻かれた。創作には晩秋の静岡で三日間。中国と日本の五人の詩人らによつて、最初はほどよい緊張感の中で、後半は和やかなムードに包まれて、順調に詩作が進んでいったという。後日、グランシップで開かれた発表の席で大岡氏は、ドイツの詩人二人を招いて行った昨年とは違つた雰囲気でも、できた。これまた連

日本と中国、5人の詩人たちが 千年紀におくる詩、四十編。

詩の楽しさですね」と語つた。

高橋睦郎氏の発句に始まり、北島氏によつて結ばれた詩の一編一編には、静岡ならではの風景が折り込まれたり、その人ならではの世界観が見え隠れしたり。混沌とした世紀末に立ち合いながらも、その先へと歩を進めなくてはならない現代人の時空間が思い思いの言葉によつて紡ぎだされ、ここにまた珠玉の作品が完成した。



新藤凉子
しんどうりょうこ
1～9歳を旧満州で過ごす。共立女子大学中退。61年第一詩集『薔薇歌』刊行。主な詩集に『ひかりの薔薇』『薔薇ふみ』『薔薇の日々』連詩集、高橋順子・吉原幸子共著『からすつりの花』など。32年鹿児島県生まれ。熱海市在住。

北 島
ペイダオ
78年に非公認文学雑誌『今天』創刊。朦朧派。87年以降、欧米の大学で教鞭を執り、作品は25ヶ国語に翻訳。日訳、英訳された代表作に詩集『鍵を開ける』、『天涯にて』、『小説』『波動』、『随筆集』『青い家』など。カリフォルニア在住。49年北京生まれ。

大岡 信
おおおかまこと
東京大学文学部卒。東京芸術大学客員教授、日本芸術院会員。詩集に『記憶と現在』『春 少女に』、『著書に『折々のうた』『連詩の愉しみ』『ヨーロッパで連詩を巻く』など。96年マケドニアのストルーガ詩祭にて金冠賞受賞。31年三島市生まれ。



連詩には決まった形式がないが、会では昨年にならって五行と三行の詩を交互に繰り返すフォームをとった。それぞれの詩の中にはさまざまな視点、モチーフが折り込まれ、そうした前の詩を受けて、別の詩人が後の詩を創作してゆく。しかし、なかにはどういつ繋がりをもつか、一見わからない詩もある。そんな繋がりを読く場として連詩の発表会がグランシップにおいて開かれた。以下はその解説の抜粋である。

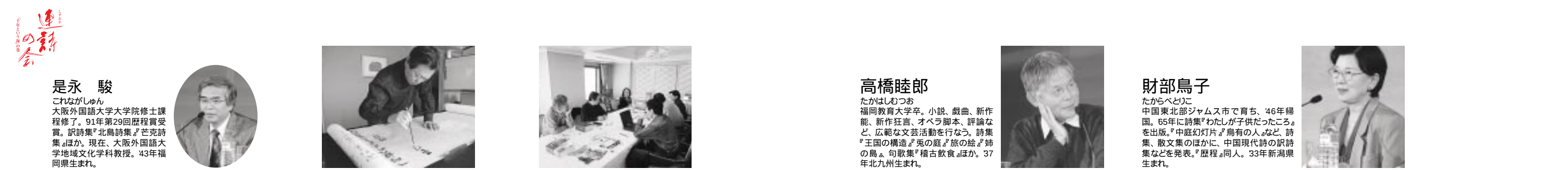
【第二編／第五編】
**千年紀と千年紀の狭間で
詩を連ねる人々。**

睦郎…二千年紀から三千年紀へのこの時を海と海とを繋ぐ小さな「海峡」に喩え、連詩の行為と同じく人間の行為もまた前に「進まなければいけない」と、「一人と四人」というのは自分と他者であり、中国（北島氏）一人と日本人四人という意味ではありません。
鳥子…「虹を吹く」というのは言葉を吹く私たちのことですね。前の詩の「一人」を受けて繋いでいます。
信…財部さんの詩が「古代」なので、私は未来で語りました。「時間を超えた未来」は今、まさに世紀を超えようとしている、ということでもあります。
凉子…詩を書く人というのはいつまでも大人になれずに、世間の風潮に逆らっている。すなわち、風に逆らうかもめたちです。
北島…前の「夕陽」から繋いだ詩で、中国の有名な詩から「夕陽」死を連想しました。振り返れば二十世紀は重苦しい世紀であり、時計でさえその重苦しさに耐えかねて、部品を吐き出すこと。

【第十二編／第十六編】
**誤解から生まれた詩。
問いかけから生まれた詩。**

凉子…前の「雲」からの連想ですが、雲という言葉を使わずにカタチにしかつたんです。
信…前の詩はまさに「青空」のイメージで、「遺跡を発掘」しているのは日本ではなくてアフリカ。「小躍り」しているけれど、その人自身は「孤独」であるという皮肉を加えています。
鳥子…大岡さんの今の解説を聞くまで、私はそれは登呂遺跡のことだろうと。ですから、山脈というのは、ホテルの窓から見えた山々であり、翌朝喉の調子がおかしかったでこんな詩ができました。
北島…日本人の方々の詩は私の詩よりもずっと明るいの、前の「風邪」を生かして私の調子に引き戻そうとした。（笑）「楽隊が招きよせ」る人とは指揮者であり、すなわち詩人でもあります。
睦郎…北氏が「静けさを覆ってしまっただ」としてくれるのだと僕に言っている、聴覚の闇の中に視覚の静けさを取り戻そうとしました。

一	ひとつの千年という海がここに終わり 別の千年という海が 目の先に見えている 二つの海のあいだ 切り立つ海峡を漂う舟 引き返すことができないなら 進まなければ 舟には五人 一人と四人 中の誰にとっても	鳥子
二	虹を吹く一人の口が力を込めて あれ あんなにも尖っているが 古代殷の国では虹は天の蛇だった	睦郎
三	それは今では時間というものになった 片方の端で少年の心につながり いつでも旅に出発しようと身構える 弧を描いて飛ぶその心の目撃者がいう あ あそこに 時間を超えた未来がある	信
四	風に逆らうかもめたちが 北國の砂浜にならんでいるのを見た 夕陽に染まり 生きている！ とばかりに	凉子
五	そしてはるかな山が最後に知っていたのは 夕陽はすなわち死 ひとつの世紀が過ぎ去り 時計はすべての部品を吐き出す わたしたちはいったい誰を裏切ったのか	北島
六	それでも朝は来るだろう 一晩中眠らなかった幸せなカップルにも 一晩中眠れなかった思いつめた女にも	信
七	しのびにしのんで しのつく雨に打たれて 身ぶるいこらえる 竹の根の恋 細くからんでどこまでも	凉子
八	より怖ろしいのはフローラか フォーナか 私たちの午後をながたと議論して 何度も注ぎ足したお茶が冷えるまで	睦郎
九	酒を飲むなら桜を浮かべて と思うより早く 花びらは盃に盛んに降ってくる もの惜しみしない花ね 今日 一日で散り果てる	鳥子
十	白い鳥が飛び立ち空いちめんの雪となる ふいにふりむくわたし 鏡に映るのは大地の荒れ果てた姿	北島
十一	芽生えよ 麦 繋がり立て 樺 私は麦だ 樺だ 樺の届く雲	睦郎
十二	牛 馬 そして羊 季語にない動物が空に浮かんで 悠悠	凉子
十三	青空の下 遺跡を発掘する人々 三十世紀昔の碑文に 朝夕の挨拶言葉を発見して 小躍りしている孤独な考古学者	信
十四	やさしい山脈に囲まれて眠る夢の中で 私は障子を貼りながら さっそく風邪を引きはじめた	鳥子
十五	病の路を 路標と日日は逆に歩き 互いに別れの言葉を交わす 楽隊が招きよせた風が 今この時の静けさを覆ってしまった	北島
十六	耳の中を無にするために しっかりと目をつぶる 耳の闇を奔る流星	睦郎
十七	観音は瞑想に入っている ふくよかな肩と腰 流れる裳裾 言葉から遙かに遠く このとき知らない小島のあたりで 明日の太陽が準備されている	鳥子



是永 駿
これながしゅん
大阪外国語大学大学院修士課程修了。91年第29回歷程賞受賞。訳詩集『北島詩集』『芒克詩集』ほか。現在、大阪外国語大学地域文化学科教授。43年福岡県生まれ。



高橋睦郎
たかはしむつお
福岡教育大学卒。小説、戯曲、新作能、新作狂言、オペラ脚本、評論など、広範な文芸活動を行なう。詩集『王国の構造』『兎の庭』『旅の絵』『姉の島』a. 句歌集『稲古飲食』ほか。37年北九州生まれ。



財部鳥子
たからべとりこ
中国東北部ジャムス市で育ち、46年帰国。65年に詩集『わたしが子供だったころ』を出版。『中庭幻灯片』『鳥有の人』など、詩集、散文集のほかに、中国現代詩の訳詩集などを発表。『歷程』同人。33年新潟県生まれ。



【第二十三編】第二十七編】
愛の歌が続いて。
やがて夢からさめて。

信…前の詩から獅子座を思い、宇宙の大きさと逆の小さな世界を考えて、こんな詩にしました。

涼子…「25階」にあるホテルの部屋は静岡の街が一望でき、富士山や松原や海を眺めながら3日間もいると、夢想到うたりして、背中に羽根が生え、たよになるんです。最初は、あなたではなく、あの人としたのですが、大岡さんが、あなたの方がいいと。不倫を思わせるような詩で、みんなに「あなたが好きだ」と言ったのですが、みなさん、せせら笑ってましたね（笑）

北島…前の二人が愛をテーマにしてますので、いくら私でもそれを拒否できずに（笑）、こつこつ詩を作りました。「地平線」は琴の弦のよつに、「歌」を弾き鳴らすというわけです。

睦郎…いつまでも愛を続けるとんざりしてくるので、そろそろ愛を断ち切らなければならぬ辛い役目です。（笑）朝の詩で暑くない感じで作りしました。

涼子…「極彩色」の夢を見る人は精神分裂症の人だそうです。夫の遺産を分割するのがいや」といつこの詩を見た大岡さんには私の本性を見た、といわれました。（笑）

鳥子…前の「娘」を虚栄心の強い派手な娘と考え、グラジオラスに喩えました。夏の花は凋落の秋になうたら、ただ静かに「庭の隅」に立ち枯れていてほしいと。

北島…少年と父親の関係は、一世代前の詩人との関係に似ていて緊張しているように思えます。

信…前の「戦場」の銃を、オリンピックの「ピストル」に変えました。百分の一秒を縮める辛さは、選手とその敵にしかわからないものです。

涼子…「ピストル」から、無音の火ばな」を思い出しました。それはNASAに見学に行ったとき、遙か遠くのデイズ・ワールドの花火が上がっていて、でも音は聞こえなかったんです。アメリカって広いなあと思いました。

睦郎…「火ばな」という言葉を見つけて、しめた！と。火は私が好きなものの一つですから。火は一時たりとも同じカタチをしていない、でも明らかに火は火であって、そういう私の好きな火の世界を詩にしました。

十八 東の聖地へ向かう巡礼の路で
ひとつの井戸が語る青い空の物語
欠くことのできない嘘もあわせて

十九 確かさだけが好きな男
岸壁に日がな一日
釣り糸を垂らして
さざ波の中に幻想は持たない
獲物の手ごたえを待っているだけ

二十 綻びだらけの中世の織物
襤褸裂れになる寸前で
一億円の値がついている

二十一 貨幣の位階制を考案した者こそは最高の詩人
貨幣の発明と共に人間の悲惨も始まった
人間の悲惨と共に詩の栄光も始まった
王衣を織る者が王衣を着るのはいつか
王衣を着る者が王衣を織るのはいつか

二十二 霜柱が立っている系譜図よ
今夜は天の獅子も凍りついて
われわれを咬むことはできない

二十三 くるくる回り続ける二十日鼠の運動場
平和な遊戯だ 閉ざされて 安全だ
サッカー ボクシング 相撲 剣術
スポーツと名のつくものはすべて
ルールに服する限り平和に続く格闘技

二十四 25階のガラス張りの部屋から外を眺めていると
いつの間にか 背中に羽根が生えている
破るべきは窓か ルールか あなたが好きだ

二十五 きみの名前が地平線を釘付けにして
秋風が哀しい歌を弾き奏でる
あの星を大盤振る舞いする夜警よ
新月の鍵穴から
きみという黎明の恋人をのぞき見る

二十六 コーヒーが煮える
トーストが香り立つ
夢の枕とはお別れの時

二十七 極彩色のシーンを夜毎に見るので
うんざりしている老婦人
何を聞かれても 忘れた！ と答えるので
忘却の人 と 世間の人は噂をする
夫の遺産を分割するのがいやなだけだ

二十八 親から承けた七癖のうち
この娘が われながら困っているのは
懐が軽くなると気前よくなってしまふ癖

二十九 グラジオラスの華やかな真紅
夏を続けて咲きほこり
うるさいほどに群れ歩き
見ているだけで 胸がつかえる 秋です
静かに庭の隅で裸になっいて下さい

三十 花びらがゆっくりと炸裂する
頭に思い浮かべる戦場で
少年は父親に狙いを定めた

三十一 ピストルが鳴る いっせいに しぶきがあがる
選手は地表の水溜りをひっつかいて進む
一秒の百分の一をちぢめる戦さに
筋肉が哭きながら耐える
その泣き声を知る者は 選手と敵のみ

三十二 NASAの帰り 宇宙食を食べながら
オレンジ島のむこう 花火を見た
パスのガラス越し 無音の火ばな

三十三 火ほど美しいものがあるうか
火には決まったかたがたがない
つまり どんなかたちだってある
火が夜をこめて語りつづけるのは
つねに現在形の成長または墮落の神話

三十四 燃える老人を見守るのは
例外もなく土になり崩れるわれらだ
樹々の深呼吸の聞こえる墓地で

三十五 碑（いしぶみ）と碑とが言い争い
鐘の音がいままに鐘を離れる
書き記す人が記憶の棺（ひつぎ）の蓋から
言葉の釘を抜き取る時
ひとつの時代がぶるぶると立ち上がる

箏と尺八による共演も。

連詩が披露された後は、静岡県内出身の草間路代、宮崎青畝両名による箏と尺八の演奏も行なわれた。なかでも完成した連詩をもとに発表前日に作曲したという一曲は、変化に富みながらもどこかで鎖のように繋がれた連詩の世界に呼応するように、ときに壮大に、ときに繊細に、詩人たちの朗読を一層盛り上げ、会場は詩人、演奏者への惜しめない拍手に包まれた。



【第三十六編〜第四十編】
「二人と四人」から「五人」へ。
新しい世紀、新しい詩世界へ。

睦郎…前の詩からクリスマススイプに響きあう教会の鐘の音を思い、それがキリストの愛の筈であると。そして、家々の明かりはいろんな家庭問題を含んだSOSのようだとしています。

鳥子…ホテルに滞在中は結婚式ラッシュで、玄関前の螺旋階段で写真を撮っている結婚カップルを幾度となく見ましたので、前の詩の「SOS」を写真の「ラッシュ」に重ねて。幸福を見飽きた人」とは真実を知った人であるともいえます。

信…その「見飽きた人」とは大岡さんよ、と新藤さんと財部さんが囁きあっているのを私は聞きました（笑）「荒地」は日本。その日本では愛玩口ポットなどが流行っているんですね。

涼子…21世紀の終わりがらい明くしたいな、と。発句は一人と四人でしたがこの頃になるとお酒の助けもあって、五人」の関係になりましたね。

北島…「橋」は詩の言葉、長く巻かれた空白」は大岡さんが巻紙に記された今回の連詩で、その余白はまだいろんな言葉が飛んでくるのを待っている。つまり今日の連詩の終わりは、次の連詩の始まりでもある。最後の一編でもありますし、責任の重さを感じながら、未来に開かれたこのような詩で結びました。

三十六 愛の罅は 凍傷の空に 際限もなく共振
窓という窓には SOS が点いたり消えたり
この深夜 待たれているのは どんな祝福？

睦郎

三十七 豆電球がまたたくホテルの螺旋階段に
花嫁と花婿が幼くならび立ち
フラッシュが焚かれている
ビデオカメラが廻っている
人生の幸福を見飽きた人が通り過ぎる

鳥子

三十八 渡り鳥は十の湖水 百の河川を見おろして
懐かしい古巣が潰されたことに気づく
鳥も住めない荒地に愛玩口ポット犬大繁殖

信

三十九 何かが変わる 変る風の向き
何かが降ってくる天の方から
光の束が
旅する五人のころもあかるんで
パッカスが囁みしだいた唄になる

涼子

四十 四季が渦巻きの上を旋回し、橋は別の言葉へと跳躍する
長く巻かれた空白はあたかも航海にない未知の水域
詩の行がまっすぐ飛んで来るのを待っている

北島

創作 二〇〇〇年十一月二十二日(水)起

於 ホテルセンチュリー静岡
参加者 詩人 大岡 信
北 島
新藤涼子
財部鳥子
高橋睦郎
是永 駿

発表 二〇〇〇年十一月二十六日(日)
於 グランシップ十一階会議ホール・風



辻村寿二郎

S E R I E S
わが羅針 第9回

命の不思議。

「手なら手の命っていうものがあるから、隅々にまで気持ちが行き届かないと、ちゃんと意思をもった人形は生まれない。目も鼻も手もそれぞれがすべて、作る人の意思を伝える形に表現されてはじめて、命があると思うのよ」

観念を捨てるのがいい。

仕事場を訪ねると、辻村氏は舞台やトのよつな一角で、たくさん布に囲まれていた。インタビュアの間中、氏は古布の糸をほどこいてはその布をいとおしそうに撫で、糸屑を払ってはまた撫で、アイロンをかけてもう一度撫でといった具合で、氏の掌は一枚の布から一時足りとも離れてはいられないようであった。" 気配もなく突然のできごとのように、けれどもなるべくしてなうた職業と氏が語るまでもなく、それが天職であることを慈しみに溢れたその掌はおしえてくれた。

——人形が好きという方は多いですし、それを作ることを楽しみとされる方もそれな

“若い頃は名前が立派すぎて重たかったけれど、そろそろいいかなと思って”
99年から名前をカタカナ「ジュサブロー」から漢字「寿三郎」に戻した。

りにいうしゃいます。けれど男性で、しかも小さい頃からというのは、そこにはよく特別の環境がありだたのかな、と思うのですが。

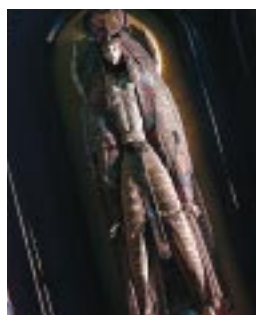
「そこではなくて、気がついたら人形を」作ってた、という感じ。綺麗な布が好きでね、それを漁っては切ったり貼ったりして、うちにだんだんカタチになっていて、小学校に上がる頃にはもうそれが人形になってましたから。誰にも教わってないの。ウチは芸者置屋の料理屋をやってたから、芸者の着物を切つてよく叱られたりして。(笑)親は止めさせてくたさハサミを欄間の上に置いたりして苦労してましたけど」

——昔作られた人形は、今の作品とは随分違った顔をしたらしゃいますか。

「それは手元に残っていないから、わからないんです。満州を引き揚げた後は広島に住んでいたんだけど、その二階から隣の家が見えてね。そこに4つか5つ年下の可愛い女の子がいたの。で、その庭めがけて、作った人形をよく放り投げてた。屋根から人形が降ってくる！って、その子はだいぶ驚いたらしいけど。(笑)そんなふつにして、作った人形はみんな近所の子にあけてしまつて。作り終えると、気持ちはツツと人形から離れてしまつたのね。おそらく人形そのものよりも、私は人形を作るといふ作業が好きなんですよ」

——先生はさまざまな物語や史実に題材を求められることが多いようですが、その人物像はどういう部分から纏いていけるのですか。

「私はどうも人間が好きみたいなのね。



96年12月には東京・人形町にアトリエを兼用した「ジュサブロー館」をオープン。氏の人形世界が堪能できるほか、作業中の本人に出会えることも。

人間にとっても興味がある。で、歴史上の人物などでは肖像画が残っていたりしますよね。けれど、それは本人の気に入るように描かれていたりして、決して本当の姿ではなかったりするわけ。だから、一人の人物と向き合うときは、私は観念みたいなものをまず捨て去ることから始めるの。そして、自分なりの人物像を描いていく。ときには見る人の思いとは違った顔形になることもあるけれど、私がやってみることは創作であつて、復元ではないわけだから」

——できあがった人形に向かつて真先にかけた言葉は「ごめんなさい」だとお聞きしましたが。

作ることへの罪の意識。

「そういうことはいつも思っています。人形ができあがることにまた一つ罪を犯したなと。だいたい人間というのは何かを作りたがるでしょ。そういう作るといふ意識があるから、文明や文化というものも生まれるわけで、だからこそ人間としてやらなければならぬ作業の一つではあるのだけれど、それは自然に対するある種の冒瀆だと思うのね。自然には付け足すものがないはずだから。素晴らしい自然があるのになぜまだ作ろうとするのか、それは自然に逆らつてるといふことでしょ。でも、人間はそういう命で生まれてきているから、それが人間の悲しみ、苦しみでもあつて。だから、罪の意識がないとモノは作ってはいけ

「若い頃は描いていたけれど、今は頭の中ですでに完成してるものをそのまま手でカタチにしているだけ。だから、手を動かしてるとき頭のの中はもう次のことで一杯なのね。もちろん頭の中のイメージと実際のカタチとは異なることもあるけれど、それはたとえスケッチがあつたとしても同じで、頭の中のをカタチにする仕事というのとはとても心許なくてシンドイなあとつくづく思つた。ただ、この歳になると、イメージとのギャップは手が自然に動いて調整してくれるけれど」

——先生は以前、人は十人十色の思いで人形の意志を見極めようとするから、うがつた見方ははねのけるだけの固い意思を人形に持ち備えてやりたい」といふようなことをあしやつていましたが、そのためにはどのようなことが必要だとお考えですか。

「顔だけなめるように作つて手足はどうでもいい、ということではそこに命は吹き込まれないじゃない？ 手なら手の命つて

【つじむらじゅさぶろう】

人形師、着物デザイン、舞台、映画等の衣裳デザイン、演出、脚本、アートディレクターなど多彩に活躍。少年時代を中国大陸で過ごし、44年に広島に引き揚げ、終戦を迎える。母の死をきっかけに22歳で上京。歌舞伎小道具制作会社に就職。26歳で独立。人形師を志し、西洋人形、古典人形と進む。74年NHK『新八犬伝』の人形美術を担当、一躍注目を浴びる。その後、次々と作品発表。演出家蛭川幸雄と組んだ仕事も多い。代表作にNHKの『真田十勇士』。泉鏡花作品をモチーフにした『鏡花曼陀羅』シリーズ、遊女シリーズ『吉原』。舞台衣装『王女メディア』など。76年『51年度ゴールデンアロー賞』。77年『51年度芸術選奨・文部大臣新人賞』ほか受賞歴多数。90年にはイギリスの『ローレンス・オリビエ賞』にノミネートされる。著書に『人形曼陀羅』など。33年、満州錦州省朝陽生まれ。



ないと思ってるの。事実 私の人形を見ただけで、嫌だと思っ人もいるわけで、それはその人を傷つけているというわけでしょ。見えないところで傷もつけてる。そういうことを自分はちゃんとわかっていたいと思うんです」

——2001年の春、グランシップで開催される辻村寿三郎人形展』ではとくに戦国時代の人物が多くお目見えするそうですが、同じ女性でも、たとえば戦国の世の女性と樋口一葉の『たけくらべ』の女性とでは、人形の表情や醸し出される雰囲気はまったく違いますよね。そして、そこに先生独特の時代観を感じるのですが。

「そつかもね。どちらかというと私は、時代が持つる目に見えない社会的なパワーをカタチとして見せたいと思うほうだから。戦国時代は屏風絵がたくさん残ってるけど、描かれてる女のうってみんな華奢じゃない? スーッとして。でも、あれは絵だからそう描いてるんであって、あの時代は華奢じゃ生きられないと思っちゃっ。だから、私の人形はボリュームが出てきちゃっわけ。それから同じ明治でも、一葉と鏡花とでは微妙に違う。それが一目見ただけ

で、これは江戸、これは鏡花、とわかるようにしたいとは思ってるんだけど」

——期間中には、佐藤しのぶさんのアリアに合わせて、人形舞も披露されるということですが、『オペラの国のアリア』P17、そうした動きを伴う人形とそうでない人形とでは、創作する上でどのように違いますか。

「それは工程から何から全然違う。動いてはじめて生きているように見えたり、表現が広がったりするものと、置いてみて一発でわからなければならぬものとの違いは大きい。サイズのにも動きのあるものはある程度の大きさが必要だったり。でも、それも舞台によるのね。あまり小さな舞台では大きい人形は気味が悪い。よく等身大にしてはどうかと言われるけれど、人形は人間サイズにしてはいけないと思ってます。等身大にするなら、人間が演れればいい。やはり人形というのは、大きさはもちろん精神もミニチュアなのよ。世界観が変わらなければ意味がない。今回の人形舞について詳しいことは未定だけど、オペラは好きだから楽しみにしてます。いろんな音楽があるけれど、クラシックは肉厚で深い。そして、オペラにはいつも海を感じる。オペラの世界は広くて、私たちが知らないオペラはまだたくさんあるような気がするのね。でも、みんなある種の固定した観念を持ってオペラなり、ジャズなりに接しているから、非常に狭いところでしか拾えてない。観念をふと外せると、歌の神髄にもっと近づけるんじゃないかと。だから、今回のように人形舞がそれぞれの観念を外す手助けになっ

て、オペラそのものが深く楽しめるようになれば、と思いますね」

——最後に今後の創作テーマなどをおしえてください。

「私は昭和から大正、明治、江戸と時代を少しずつ遡って、今ようやく源氏の世に來ているんですよ。この先は古代、原始まであるし、日本には神話も一杯あるでしょう。えっ?と思うような凄い神話もたくさんあるし、早くやりたいなあと。正直言うと、源氏物語で昔からあまり好きじゃなかったの。なんか嘔げくて。あんな十二単着て、あんな様式の中で過ごせるものか?。でも、最近人形を作るようになって、これは凄いと。だいたい十二単のデザイナーって一体誰なんだろうね。あの頃だうて太っ



1/13チケット発売

辻村寿三郎人形展～花の宴～

2001年3月14日(水)～28日(水)

10:00～17:00 (入場は16:30まで)

会場:グランシップ6階交流ホール

一般・大学生 500円(当日600円)

中・高校生 300円(当日400円) ※小学生以下は無料

同時開催

ターシャ・テューダーの世界展 6階展示ギャラリー (3/17～3/31)

期間中は同展とのセット券(当日券のみ。前売価格で入場可)あり。

た人も瘦せた人もいて、背も高かったり低かったりしたはずなのに、誰が着ても十二枚のグラデーションが綺麗に出るっていう、あの仕立て方は何なのよと。あの時代のお縫子さんが今の時代にいたら、さぞかし凄いものを作ってたんじゃないかな、なんて思うわけ。そもそも私が着てるような着物の様式は、あの頃すでにあつて、これだけ単純な様式で作れて、しかも着る人に合わせて仕立て直せるなんて凄いことですよ。そうしてみると今のデザイナーは軟弱よね。(笑)ただ、こういうことは触って作ってみないとわからないから。私自身もあれこれ触っているうちに日本の文化の素晴らしさ、源氏物語の面白さに気づいたようなところがありますね」

